

Title	KT2コーディングシステムによる雑誌分析 : 週刊誌『アサヒ芸能』七十年代の目次より
Author(s)	景山, 佳代子
Citation	年報人間科学. 2002, 23-2, p. 213-227
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10882
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

KT2コーディングシステムによる雑誌分析

——週刊誌『アサヒ芸能』七十年代の目次より——

〈要旨〉

KT2システムとは長文のテキストデータをコーディングするためのコンピュータプログラムである。本稿は雑誌分析にKT2を利用することの有効性を明らかにすることを目的としている。

まずKT2の特徴と今回利用するデータについての説明を行う。つぎにKT2の利用手順と、そのコーディング結果を示す。そして最後に雑誌分析におけるKT2の利用可能性を述べる。

キーワード

KT2システム、コーディング、『アサヒ芸能』、一九七〇年代

景山 佳代子

はじめに

K T 2 システム (以下、K T 2) は、長文のテキストデータをコーディングするためのコンピュータプログラムである。このコーディングプログラムでは、「字種切り」と呼ばれる方式により単語を抽出し、その頻度と出現位置とをグラフ化することができる。

本稿は雑誌分析に K T 2 を用いた場合なにができるかを提示することを目的とする。はじめに K T 2 の特徴と今回用いるデータについて説明する。つぎに実際に K T 2 プログラムを実行させ、その手順とコーディング結果を示し、最後に雑誌分析における K T 2 の利用可能性を明らかにしていく。

1. K T 2 について

雑誌に限らずデータ分析に際して重要になるのがコーディング作業である。コードは分析の基本となる要素であり、コーディングがいかに行われるかは、それにつづく分析の成否を左右するといつてもよい。とくに従来の雑誌分析の多くが、記事中のテーマ/言葉の頻度からコードを導出し、それらのカテゴリー化に焦点をあわせていることを考えるなら、コーディングがいかに重要な作業であるかは即座に理解されよう。

ではこのようなコーディング作業を K T 2 というコンピュータ

プログラムで行う事の利点は一体どのような点にもとめられるのだろうか。まず第一にあげられるのは、コンピュータというツールを利用することによってコーディング手続きが明確化されるということである。コンピュータでのコーディングではルールは一定に保たれ、手作業の場合のように、時間の経過とともに判断基準が揺らぐようなことはない。これは分析の「妥当性」と「信頼性」を確保するための必要条件でもある。しかもコンピュータ上での作業はすべて保存可能なので、第三者に対してコーディング基準を明示することも容易である。

二つめの利点は、K T 2 の特徴ともいえるクロス表によるコーディングの結果表示である。K T 2 は切り出した抽出語の出現頻度をその出現位置とのクロス表の形でグラフ化できる。分析者は、抽出語の出現状況をグラフ上で絶えず比較しながら、それらを分類・統合し、コードを作成していくことができる。これはデータの文脈にそって分析者があらかじめ、ある文字列をどのようにコード化するかを決定する、従来のコーディングプログラムと大きく異なる。つまり K T 2 の場合、コードの柔軟性は高く、データに埋め込まれているストーリーに拘泥されることなく、コード間の関係を把握することが可能になる。

以下、このような特性をもつ K T 2 を実際、雑誌分析にどのように利用できるかについて述べていく。

2. データについて

一九九九年十月「アサヒ芸能」編集者数名に対して行ったインタビューで、「アサヒ芸能」編集長をつとめたことのあるN氏は次のように語っている。⁵⁾「週刊誌（の記事）を一本か二本、読んでから買う人はいいですよ。まず買うか買わないか、パラパラは読んでみるね。まともに一本でも読んでから買うっていう人はまず、いいですよ。見出しと、パラパラパラの印象ですよ。」「同様のことは他の編集者の口からも語られ、中吊りや週刊誌の表紙に飾られる見出しは、読者がどの週刊誌を手取るかを左右する重要な決め手であると認識されている。このことは週刊誌の目次が読者を惹きつけるためのキャッチコピーとして機能し、またそれを十二分に意識している作り手側は、目次タイトルに自身の雑誌を強烈にアピールする言葉を使用していたと考えることができる。よって本稿では「アサヒ芸能」の目次というテキストデータに注目する。

利用する目次は一九七〇年から一九八〇年までの十一年分で、テキストファイルにして340Kバイトになる。⁶⁾一年分はおよそ五十冊前後で、一冊あたりの目次タイトルは十五本前後になる。目次のなかには、「愛憎事件を演じたこの憎まれっ娘」（七十年一月二九日号）という見出しのあとに、「有名ドラマを再起不能にした年上妻」「社長の契約夫人が自殺したあと」「夫をコケにした人妻の浮気生活」といった複数の小見出しをもつものがあるが、これら小見出

しもすべて入力の対象とした。一方、「仙人部落」（漫画）や、「どてらい野郎」（小説）、「おれは野次馬」（コラム）のような連載もののタイトルについては、今回の入力の対象からは外している。

3. コーディングのための準備作業

KT2を利用するためにはいくつかの準備作業が必要になってくる。まず第一の作業はKT2でデータを読み込ませるために、データの最初と最後に \wedge BODV \vee \wedge BODV \vee というタグを振ること。つぎにテキストデータの形を整えることである。KT2では漢字・カタカナ・ローマ字という文字の種類別に単語を抽出する「字種切り」という方式を採用しており、たとえば「年末年始スターのゴシップ大特集」というタイトルでは「年末年始」「スター」「ゴシップ」「大特集」という単語が抽出されることになる。しかし今回利用する目次のようなデータでは、字数が非常に制限されているため「月収一千万円金髪千人斬り」といった句読点を省略した表現が多くなる。この場合、KT2では「月収一千万円金髪千人斬」を一語としてカウントしてしまふ。よってKT2が適切に単語の抽出を実行するよう「月収 一千万円 金髪 千人斬り」というように、単語に区切るためのスペースを挿入する作業を行っている。

つぎにKT2の特徴であるクロス表の作成のためには、縦軸と横軸の二本の軸が必要になる。一本の軸は抽出コードによって決定されるが、もう一つの軸はデータ中には存在していない。この軸を設

定するのがHTMLタグと呼ばれる記号で、 \wedge HTV \wedge HTVと表記され、分析者はこのタグを埋め込んでいくことでクロス表を成り立たせるためのもう一本の軸をつくるのである。このタグをふる位置については、クロス表の結果をみながら適宜変更することが可能である。

本稿では一九七〇年から一九八〇年までの目次をデータとしているので、一年毎にこのタグをふっている。つまり横軸に抽出コード、縦軸に一九七〇年から一九八〇年までの時間軸がくるよう設定した。もし雑誌における編集長の影響といったものを知りたいのであれば、編集長の交代した時期毎にタグをふることもできる。以上の手続きを踏まえた上でKT2を実行する。

4. 用語の抽出

KT2を実行するとテキスト中の用語が抽出される。だが当然のことながらそのままではカウントされる用語はあまりにも膨大な数になってしまう。またKT2の「字種切り」という用語抽出の方式では、抽出されない言葉もある。こうした必要な用語の抽出と不要な用語の抽出の停止という作業のために用いられるのが、「複合語」「停止語」「復活語」の三つのウィンドウからなる辞書機能である。KT2では抽出された用語はすべてその出現位置と出現頻度の順でそれぞれのウィンドウに一覧表示されるので、分析者はこの一覧を参照しながら辞書を作成していけばよい。たとえば「ボン引き」の

ような言葉の場合、抽出されるのは「ボン」という語だけである。よって「ボン引き」を一語として抽出するよう登録しなければならぬわけだが、そのときに使用するのが「複合語辞書」である。この辞書窓に「ボン引き」と登録し保存すれば、KT2はこの用語を抽出するようになる。またKT2では平仮名は抽出されない。「おんな」といった平仮名だけの単語の場合も「複合語辞書」に登録する必要がある。

つぎに抽出される数が多すぎたり、カウントしても意味のない語の抽出を停止させたいときには、「停止語」の辞書窓にその単語を登録すればよい。たとえば今回のコーディングでは「特集」といった枕詞のように出てくる単語や「ホント」という相づちのようによく使われる表現を「停止語」として登録した。また「ヤッホー」「ラリホー」といった用語も同様に処理した。

またKT2では一字のみの漢字は抽出されないもので、そのような言葉で抽出する必要があるものについては「復活語辞書」に登録していく。たとえば今回のコーディングでは「妻」や「女」「客」といった単語を登録している。

これら辞書の作成は本文の変更はしないまま、抽出する用語を変更させる手続きであり、さらにはどのような用語をあえて抽出し、反対にどの用語をコーディングから削除したのかといったコーディングルールの明確化にも重要な意味をもっている。そして分析者は登録した用語もまた参照しながら、コーディングを進めていくことができるのである。

5. 抽出語によるグラフ作成

以上の作業手続きを繰り返したわけだが、それでもなお抽出された用語は三万語以上にのぼった。本稿ではこのうち出現頻度が十五以上、出現頻度の順位でみると上位二二六までの単語に限定し、グラフを作成していく。ただし二二六もの単語をなんのオリエンテーションもなく扱っていくことはかなり難しい。

そこで2節でも述べた週刊誌における目次タイトルの重要性を考慮し、まず総出現度数が一〇〇以上のコードについてのみグラフを作成する。このグラフにおいて出現状況が目立つコードを七十年代「アサヒ芸能」を特色づける要素とみなして残りの語を選別していくという手順をとることにする。この場合、対象となるコードは十三種類で、これらコードを横軸とし一九七〇年から八十年の十一年を縦軸にとったグラフが図1である。

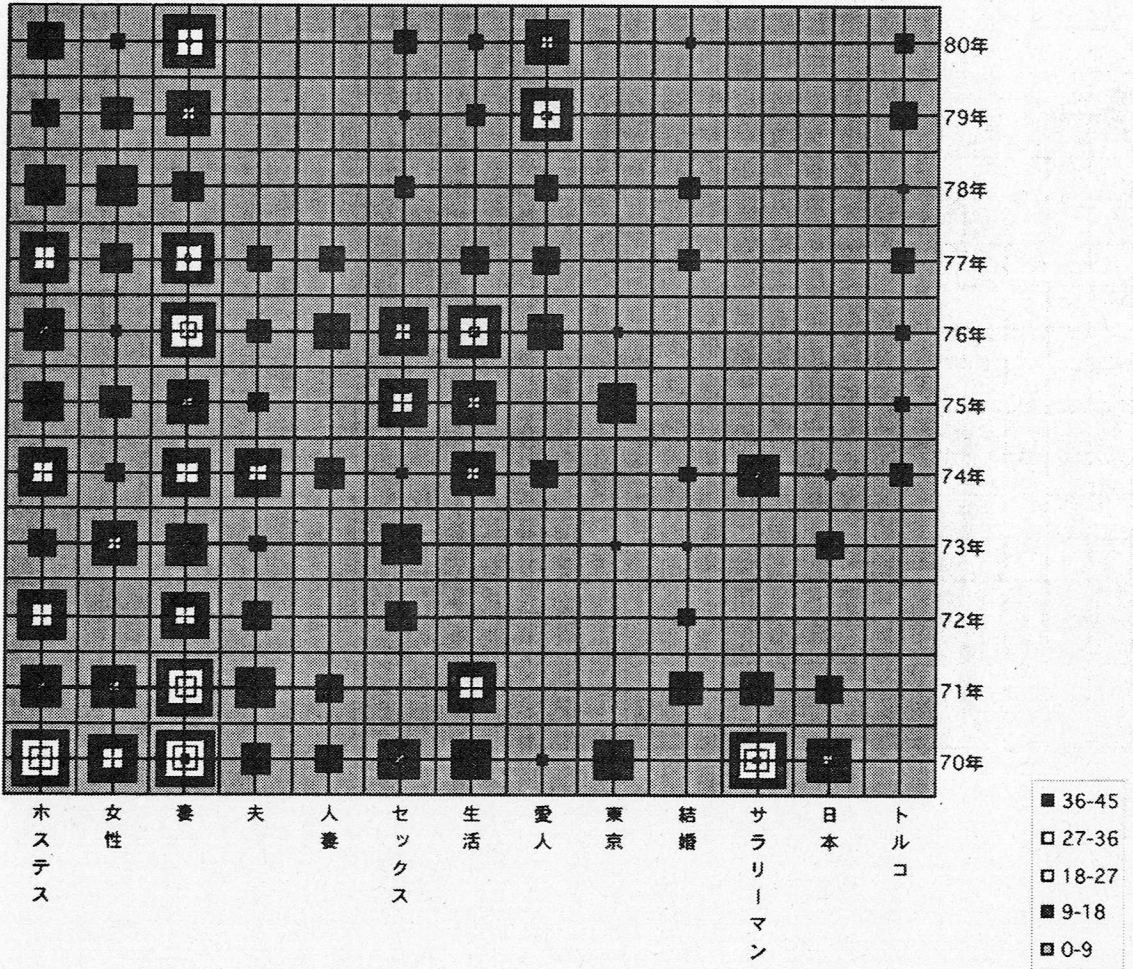
コードの出現状況を具体的に見る前に、このグラフの見方について簡単に説明しておく。グラフは等高線グラフを真上からみた形になっており、グラフ上の四角の面積が大きければ大きいほど、四角の重なりが多ければ多いほど、その年における語の出現頻度は高いことを意味する。また図の右下にはグラフの目盛間隔と目盛の最大値・最小値が示されており、このグラフの場合、目盛間隔は九であり、出現頻度が〇から九の語については四角が表示されない設定になっている。たとえば「東京」というコードをみると七一年、七二

年は出現頻度の表示がないが、実際には七一年に九回、七二年に五回、出現している。ただし図1の場合、全体の出現頻度からみて、九回以下の出現はコード間の出現状況を把握するのにあまり適切でないかと判断したので十回以上出現しているものについてのみ表示されるよう設定しているのである。さらにこのグラフの最大値は四五であり、四六回出現しているものも六十回出現しているものも四五以上の出現ということで一律に表示されているが、この設定も先ほどの理由と同じである。このように目盛間隔や最大値・最小値はコード全体の出現状況をみながら適宜変更していく。

では実際このグラフからはどのようなことがわかるのか。まず見やすく明らかにするのは「ホステス」「女性」「妻」が非常に多く出現していることである。さらに「セックス」や「生活」も十一年間を通じてほぼ出現していることがわかる。またこれらコードと関連のありそうな「人妻」や、「愛人」、「トルコ」といったコードも十一年という時間を通じて比較的よく出現している。

よって今回の議論では、七十年代「アサヒ芸能」を特色づけていたと考えられる「妻」「女性」「ホステス」「セックス」といったコードを手がかりにして、グラフの精緻化をすすめていく。そのために最初に必要になるのが抽出語の精練である。つまりKT2で抽出された、残り約二二〇語のなかから、さきのコードとの直接的な関連性を認められない用語、たとえば「競馬」や「八百長」「殺人」といったものを削除していくのである。削除した語については（要望があれば）第三者の参照が可能な状態で記録されている。これによつ

出現頻度100以上の用語一覧：<図1>



て最終的に二三種類、総出現度数六一九二となる語を抽出した。これらの語からクロス表を作成し、その出現状況によってコードの統合をすすめていく。

6. コードの統合

データから一定のルールに従ってコードを抽出することは、分析の基本となる要素を抽出することであり、それゆえコーディングが重要な作業になることは述べたとおりである。しかしバラバラのコードを抽出するだけでは、分析作業に入ることができない。コード間の関連をみながらそれらを適切に統合していく作業が必要になる。この統合作業が不適切に行われるなら、いくら一定のコーディングルールに従ってコードが抽出されたとしても意味がなくなってしまう。それではコードの統合はどのようにすすめられるのか。おそらくこの統合作業でもっとも一般的に注目されるのはコードの「意味」であろう。たとえば図1にある「ホステス」「人妻」「トルコ」「愛人」というコードを統合すると仮定してみる。もし「意味」にのみ注目したなら、たとえば「職業／職業でない」という基準によつて「ホステス・トルコ」／「愛人・人妻」という分類をするかもしれない。あるいは婚姻関係に「ある」／「ない」という分類も考えられる。しかし「意味」にのみ依存しては、この統合が適切なものであったかどうかを検討することはできない。さらにそれは分析者の認識枠組みを分析に無批判にもちこんでしまうことをも

意味する。

では図1のグラフを参照した場合はどうだろうか。たしかに「ホステス」と「トルコ」を、「一般に男性を客とするサービス業」と考えるなら二つは関連があるコード同士だといえる。しかしこの二つのコードが統合可能な関係にあるかと考えたとき、その出現状況のズレから、これは別々のコードだと判断することになる。当然これとは逆の場合も起こりうる。つまり「キリン」と「電話」という二つのコードがグラフ上で全く同じ出現状況を示しているからといって、この二つのコードの「意味」が全く違うことを無視して統合することはできない。この場合、むしろ分析者が考えるべきは、このような共変が起こっているのは単なる偶然か、それとも第三の要因によるものか、であろう。

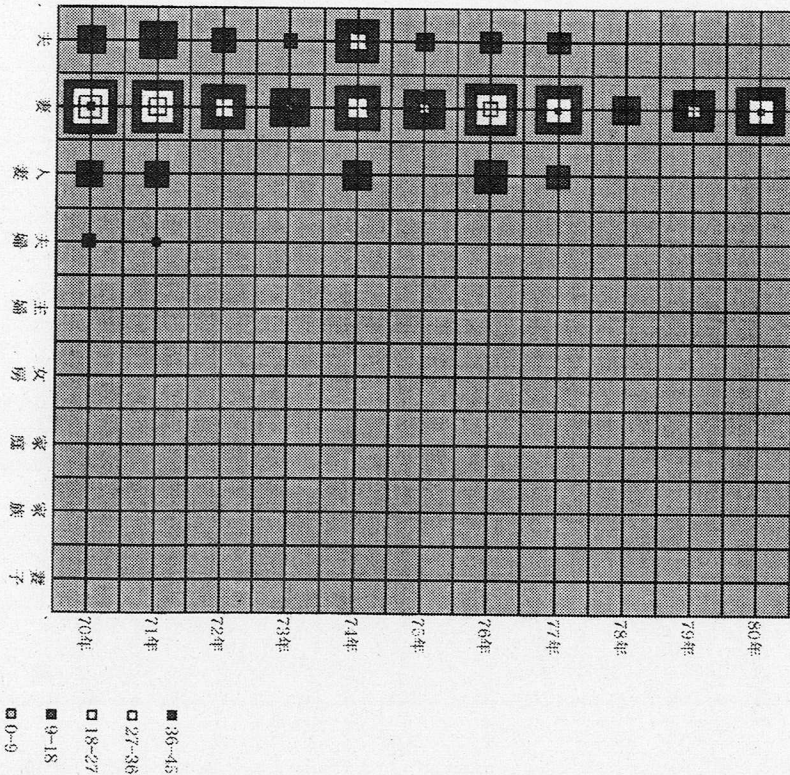
KT2はコードの抽出とその出現状況とを明示してくれるプログラムであるが、最終的にコードの統合は、分析者の手作業によるしかない。だが少なくともKT2を利用すれば、なぜあるコードとあるコードを統合していくのかについて「意味」のみに依存しない形ですすめていくことが可能になる。さらに付け加えるなら、KT2を利用した場合、コードの統合作業の保存が容易になり、どのような統合を行ったのかを第三者に提示することや、なにより自身の統合作業を何度でも繰り返し検討することができる。

7. グラフを利用した統合作業・出現頻度の場合

論者は以上のKT2の利点を活用するようコードの統合作業をすすめていったが、ここである問題が生じた。百種類以上にのぼるコードの出現頻度を一度にグラフ化しようとした場合、頻度の基準をいかにとるかが大きな問題となる。つまり出現頻度が最大のコードでは十一年間で二三八回もカウントされているのに対し、総出現頻度が十五回のコードも多数存在しているのである。このためグラフを作る場合、出現頻度の多いコードに基準をあわせれば当然、出現頻度の少ないコードはグラフ上に出現していない形になってしまう。逆に頻度の少ないコードに基準をあわせれば、一定以上の出現頻度を示すコードはグラフの縦軸すべてに出現することになり、出現状況を確認しながらコードの統合を行う、というKT2のメリットを活かすことができない。

図2は出現頻度によってコードの出現状況を示したグラフである。このグラフでは「妻」「夫」「人妻」「夫婦」以外のコードはグラフ上にあらわれない。またこれだけでは「妻」と「人妻」を統合してもよいかどうか判断がつかかねる。このため出現頻度の違いでグラフをいくつかに分け、グラフ毎に最大値と目盛間隔を変更するなどの作業を行った。しかしこのようにグラフ毎に異なる基準を設定する方法が適切かどうかはかなり疑わしい。

出現頻度によるグラフ〈図2〉



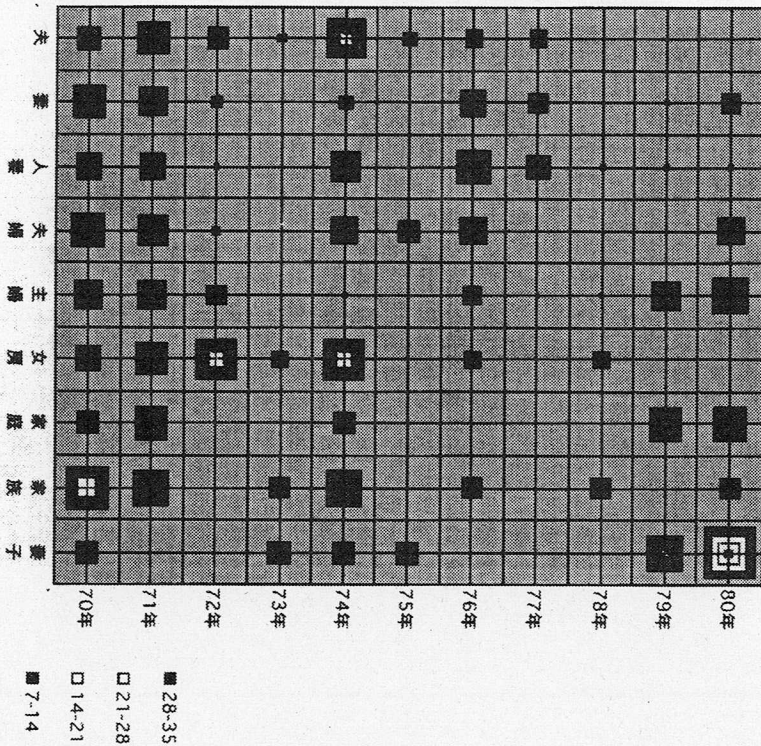
8. グラフを利用した統合作業・出現率の場合

そこでコードの統合をすすめるために本稿では便宜上、各コードの出現率をグラフ化するという作業手順を踏んだ。出現率は(各コードの年毎の出現数) ÷ (当該コードの総出現数) × 100 で求めたもので、これによって出現度数の多いコードも少ないコードも同一基準でその出現状況を把握することが可能になった。

図3は図2と同一のコードを出現率によってグラフ化したものである。ここからは図2では判断のつきかねた「妻」と「人妻」というコードが単にその意味だけでなく出現状況も非常に似ていることから、統合が可能であることがわかる。またKT2では抽出語もとのテキストデータにおける出現位置で同時にみることも可能なので、「家族」と「家庭」のように統合の判断に迷うもの場合は、その語が使われている文脈を参照することもできる。こうしてコードの出現率からみた出現状況・コードそれ自体の「意味」・コードが登場する「文脈」の三つの基準を参照しながらコードの統合をすすめていった。

9. 七十年代『アサヒ芸能』の鳥瞰図

七十年代『アサヒ芸能』の傾向を把握するための基本要素とした、「妻」「女性」「ホステス」「セックス」という四つのコードの「出現状況」「意味」「文脈」を手がかりに上述の作業を繰り返した結果、



論者は暫定的ではあるが、総出現度数二三八六、単語三十種からなる、二四コードを抽出した。これらコードの出現率に基づいて作成したのが図4のグラフである。

グラフ左部分に集まっているのは「妻」をキーワードとするコード群で、「夫婦」「家族」「愛人」などからなる。つぎにグラフ中央部分に集まっているのが「女性」を手がかりにしたコード群で、「BG」「OL」「恋人」「女子大生」「女高生」からなる。グラフ右部分に集まっているのは「ホステス」をキーワードとするコード群で、「芸者」「トルコ」「ホンバン」「サロン」などからなる。これら三つのコード群内には出現状況の共変性と逆転性という二つの変動のうちのいずれかが見いだされる。そしてこれらのコード群をみてすぐに気が付くのは、三つのコード群がある「意味」のまとまりをもっているということである。この「意味」のまとまりを、七十年代「アサヒ芸能」の基本要素と関連させて考えるなら、これらコード群が表しているのは、三つの性生活の場面とそこに登場しうる「おんな」だとみなせる。よってこれら三つのコード群を左から、性生活と関連する「家庭の場」／「恋愛の場」／「遊びの場」カテゴリと呼ぶことにし、グラフから各カテゴリの特徴とカテゴリ間の関連についてみていく。

まず「家庭の場」であるが、このカテゴリを構成するコード群はよく似た出現傾向を示している。七十年代初めと七十年代半ばにほとんどのコードが比較的多く出現していたにも関わらず、七十年代後半になると8%以下の出現率しか示さなくなる。唯一、他の

コードとは逆転の出現傾向を示しているのが「愛人」で、七十年代後半になって比較的高い出現率を示すようになる。またこのコード群には「生活」というコードも加わっているが、これは図1でみた「生活」というコードを出現率によってみたとき、「夫婦」と全く同じといって良い出現状況にあることがわかったことによる。よって「夫婦」と「生活」を並べて配置することにした。

つぎに「恋愛の場」であるが、「BG」と「OL」は同一コードに統合してもよかつたかもしれないが、言葉の時代性が非常にはつきりと出ているコードであったため、今回の議論には直接関わらないがあえて統合しない形で残しておいた。この「恋愛の場」のコード群に特徴的なのは、みてすぐ分かるのとおり七十年代半ばに集中して出現しているということである。そしてまた八十年になって一様に出現する。さらにコード間の関連に注目してみると、「OL」「女子大生」が出現率の増減においても類似した出現状況を示していることと、これら二つのコードと「恋人」の出現状況も類似していることが指摘できる。またそれほどはつきりとした差異ではないが、「女高生」というコードが他のコードと比較して微妙なズレを見せている。

このグラフの右に配列した「遊びの場」は、このグラフ全体でみたときに最もダイナミックな出現状況を示しているカテゴリだといえる。七十年代前半に出現した「芸者」「ホステス」が後半にいたってほとんどみられなくなる一方で、「トルコ」や「サロン」「キャバレー」といったコードの出現率は七十年代後半に集中する形をみ

せている。これは「遊び」カテゴリーにおける前者から後者へのはつきりとした移行を示すものである。そして「芸者」や「ホステス」が「遊び」のなかでも、会話や客との駆け引きをイメージさせるコードであるのに対し、「ホンバン」というコードが端的に示すように七十年代後半に出現するものは、より直接的に「セックス」をイメージさせるコードとなっている¹⁰。非常に興味深いことは、こうした出現の仕方が「生活」というコードが出現しなくなる七十六年を境に顕著になっていることである。

最後にグラフ全体でみていくとき、そこには「家庭」↓「恋愛」↓「遊び」という七十年代を通じてのダイナミックな移行がみられる。そしてここから七三年を裂け目とし七四年から七六年までを境期とするような七十年代の時期区分が見いだされる。ではこのような変遷は一体なにを意味しているのか。目次のみをマテリアルとする本稿では当然これへの回答を用意することはできない。しかしこの問いの発見こそが目次をマテリアルとした本稿の意義だといえる。

10 K T 2 による雑誌分析の有効性

以上、K T 2 によって七十年代「アサヒ芸能」の目次を分析した結果、9 節でみたような枠組みを得られることができた。ここから雑誌分析に K T 2 を利用した場合の有効性ということについて考えてみたい。

まず第一に、もし K T 2 を利用しなければ週刊誌十一年分、つまり約五三〇冊分の目次データを一度に、しかも同一のコーディングルールによって分析することは大変困難な作業となっただろう。さらに K T 2 で作成する「辞書」は保存しておくことができるので、今後、別の時期・別の雑誌について分析を行う場合でも、同一のルールを適用した分析を容易に行うことができる。このことはコーディングの効率化を促すだけでなく、コーディングそれ自体の信頼性を高めることになる。

つぎに K T 2 のコードは「単語」単位で切り出されるので、分析者は対象とする雑誌が用意する文脈からの自由度を比較的高くすることができ、これがなぜ重要なかを理解するために、仮に「アサヒ芸能」の分析を、そのタイトルやコーナーの趣旨といった文脈によってコーディングしていく場合を考えてみよう。このときあるタイトルはその文脈から、「芸能」について取り上げられているもの、別のタイトルは「政治」についてのものとしてカウントされる。そうすると分析の結果はおそらく、目次タイトルを見てうける印象を数値化したものとなるだろう。これも確かに一つの「発見」ではありうるかもしれない。しかし重要なのは、雑誌の用意する「カテゴリー」がどの程度出現しているか以上に、雑誌が自明なものとしている分類、もつといえは読者である我々自身もまた雑誌と共有している世界の分節化が、一体どのような「要素」とその配置によって成り立っているのかを分析していくことではないだろうか。そのため必要となるのが、既存の分類枠組みをいったん「要素」へと分解

するという解体作業である。文脈から自由になるとは、分析者が雑誌の用意する見かけのカテゴリから距離を取るということであり、KT2を利用すれば、この作業が比較的容易に行えるようになる。

それによって本稿では、「アサヒ芸能」が取り上げる、性を仲立ちとしたジェンダー関係が、その表面上の同一性とは裏腹に、七十年代という時代においてある変遷をみせていたことを明らかにすることができた。そしてここで得られた要素とその変遷は、より具体的な記事内容の分析をすすめる際の重要な指標となるのである。

注

- (1) KT2システムは、谷口敏夫（京都光華女子大学）と川端亮（大阪大学）の共同開発によるものである。KT2の詳細な利用方法などについては谷口（一九九九）と川端（二〇〇二）を参照のこと。本稿では実際にKT2で雑誌分析を行う場合、どのような手順をとるのかに焦点をあわせているので、KT2の説明については、その作業手続きを理解するために必要な範囲に留めている。
- (2) 質的データのコーディングについては、R・エマーソン他（一九五〇―一九九八）、J&L・ロフランド（一九五〇―一九九七）らに詳しい。
- (3) 欧米ではコンピュータを利用した質的データの分析CAQDA（computer aided qualitative data analysis）は、一九六〇年代頃から人文科学の領域で一般的になっていった。Seale（二〇〇〇）はCAQDAの利点として、（1）大量データのすみやかな処理、（2）分析手続きの厳密化、（3）グループ調査の簡便化、（4）サンプル

ル決定の手助け、という四つをあげている。日本では日本語がコンピュータ言語に馴染みにくいといった理由などにより、まだ一般化されたとは言えない状況にあるCAQDAだが、質的研究が盛んに行われている現在、その利用可能性を検証することは決して無駄ではないだろう。

- (4) グレーザー&ストロウス（一九六六―一九九六：一四五一―一六七）の「絶えざる比較」という作業手続きを参照。
- (5) インタビューは一九九九年十月二六日現在で、「アサヒ芸能」編集部OBのF氏、O氏、前編集長N氏、編集長H氏の四名とのグループインタビューという形式で行った。
- (6) 今回の目次資料の収集にあたって、徳間書店「アサヒ芸能」編集部をはじめ、徳間書店関係者の方々から多くの御協力を頂いた。謹んで御礼申し上げます。
- (7) 「生活」というコードは、「ホステス」「妻」「女性」「セックス」というコードと比較したとき、意味の点においても、出現状況からも、どのように扱うのが適当かがわかりにくいコードである。このようなコードは、注意深く扱う必要がある。
- (8) たとえば「家庭の場」についてのタイトルとしては「団地妻の『浮気を楽しむ会』（七十年一月一日号）や『浮気相手に五十万円抜かれて、女房には叱られて』（七三年三月二九日号）、「駐在サンと二児を連れて駆け落ちした人妻蒸発五十日間」（八十年六月十二日号）といったものがある。
- (9) 「恋愛の場」として考えられる目次としては、「新入BGを誘惑して捨てるゲバルト社会学」（七二年四月十三日号）や「中年のみなさん！OL・女子大生をこうして口説いてみませんか？」（七六年六月十日号）、「恋人募集中 ジュリーみたいな男いないかな」（八十年八月七日号）などがあげられる。

(10) 「遊びの場」として考えられる目次には、「チラリと見せた上州芸者の色濃い情け」(七十年四月三十日号)、「七四年 風俗異変トルコ文化崩壊必至 現代湯女はどこへ行く」(七四年一月十日号)、「にぎって放すな!」ピンクサロン開店前のマル秘攻略指令」(七七年三月三日号)、「東西ブレイスポットへ上野V六十分三本勝負ホステスが入れ替わるホンバンタックマッチサロン」(八十年十一月十三日号)などがあげられる。

参考文献

- Emerson, Robert M., Rachel I. Fretz, & Linda L. Shaw 1995 *Writing Ethnographic Fieldnotes*. The University of Chicago. (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳、一九九八「方法としてのフィールドノート」新曜社)
- Glaser, Barney, and Anselm Strauss 1967 *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Chicago: Aldine. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳、一九九六「データ対話型理論の発見」新曜社)
- 川端亮 二〇〇一「コンピュータ・コーディングによる宗教的ライフヒストリーの記述」、『宗教と社会』七:一三三-一五三
- Lofland, John, and Lyn H. Lofland, 1995 *Analyzing Social Settings: A Guide to Qualitative Observation and Analysis*. 3rd. ed. Wadsworth Publishing Company. (進藤雄三・宝月誠訳、一九九七「社会状況の分析-質的観察と分析の方法」恒星社厚生閣)
- Seale, Clive 2000 'Using Computers to Analyse Qualitative Data', in D. Silverman, *Doing Qualitative Research*, Sage, 154-174
- 谷口敏夫 一九九九「全文からの『位置情報付き用語』の抽出」川端亮編『非定型データのコーディング・システムとその利用』平成八年度〜平

成十年度・科学研究費補助金 研究成果報告書…三二一五八

謝辞

本稿執筆にあたり、周典芳氏・樋口昌彦氏・松谷満氏・栃沢健史氏・寺田騰氏にデータ入力のお力を頂いた。この方々の御協力がなければ、速やかにデータの分析作業に集中することができなかった。以上の方々にこの場をかりて感謝の意を表します。

附記

本稿は、平成十三年度科学研究費補助金(基盤研究(B))(2) 課題番号13410049「社会調査における非定型データ分析支援システムの開発」研究代表者:川端亮)による研究成果の一部である。

Using KT2 System for Text Data Analysis : a Japanese weekly *ASAHI GEINŌ* in the 70's

KAGEYAMA Kayoko

KT2 System (KT2) is computer program for coding text data.

In this paper I try to show how KT2 can be helpful in analyzing the magazine.

Firstly, I will describe features of KT2 and data.

Second, I show you how use KT2 and the results of coding by KT2.

Finally, I conclude with pointing out KT2's practicability for analyzing magazine.

Key Words

KT2 System, coding, *ASAHI GEINŌ*, 1970s